

■学校経営のポイント

読書教育の充実

小島 宏

第76回の読書週間は、10月27日から11月9日であった。各学校では、子供たちへどのように「読書の勧め」をしたらどうか。今号は、「ポスト読書週間」について考えてみる。

読書の効果の確認

本には様々な分野のものがあ、子供の様々な興味・関心に応じてくれる。

読書の習慣が身につくと、知識が身につく読解力を向上させるとともに、「生きる力」の基になる考える力、感じる力、想像する力、表現する力などを育てられる。

また、話題が豊かになりコミュニケーション力が高まる、楽しい時間を過ごすことができる、実際に体験できないことが間接体験できる、先人の考え方や人生観に触れることができるなどの良さもある。

ある小学校長も、「小学校高学年・中学校から本をよく読むようになった。そして、色々なことに触れることができ、将来のことや生き方を考えるようになった」と自身の経験を語ってくれた。

このような読書の効果を再確認し、子供が読書をする入り口の指導を工夫し、本を読むことを好み、楽しむことができるようにしたい。

子供の読書に関する状況

現在、教育課題として、子供の学力や体力などに続いて読書活動が挙げられ、「子供たちの読解力の低下傾向の中、特に中学生、高校生で1か月に1冊も本を読まない生徒が多くなっている。子供の活字離れが進んでおり、読書活動が課題である」と指摘されている。

以下は、子供の読書に関するデータである。

○小学校、中学校、高等学校と進むにつれて、子どもの読書をする割合が下がる。(全国学校図書館協議会)

○読書好き、新聞をよく読む子供ほど学力調査の正答率が高い。(全国学力・学習状況調査)

読書への誘い

それでは、子供を読書へ誘うにはどのようにしたらよいのだろうか。実践例を紹介する。

○国語の授業の中に読書を位置づけ、読書の基礎を指導する。

○各教科等の授業でも本に触れさせ、様々な利活用させ、本を読むことの有用性を実感させる。

○朝の学活の時間に読み聞かせや本の紹介をするとともに、実際に各自に読書を楽しませる。

○学校図書館を各教科等で積極的に活用させる。

○保護者と協力し、家庭での読書を奨励する。

なお、読書感想文を書かせて内容を深く読み取れるようにするとか、ビブリオバトルを取り入れてゲーム感覚で読んだ本の紹介を競い合うなどの実践も行われ、一定の効果を上げている。

だが、強要すると、子供が負担に感じ、逆効果となりがねない。子供の反応を見取り、柔軟に行いたい。

また、読み聞かせ、録音図書、拡大鏡の使用など、聴力や視力に障害のある子供たちも読書を楽しめるように配慮することが大切である。

校長のリーダーシップ

校長と教師は、様々な場面で、「本をよく読む・活用するモデル」としての姿を、子供たちに見せるように努める。

また、校長は、春の4月23日～5月12日の「こども読書週間」、秋の10月27日～11月9日の「読書週間」に、学校を挙げて読書への意欲づけをするようリーダーシップを発揮したい。

その上で、時々、朝会の講話に読書に関することを取り上げるなどの工夫をしたい。

(こじま・ひろし=元東京都公立小学校長・(公財)豊島修練会顧問)

●校長・教頭のための学校経営手帳!《11/24発売、予約受付中!》

2023 スクール・マネジメント・ノート

教育開発研究所【編集】 A5 変形判/定価 2,750 円

